

港にカモメが戻ってきた

—災害支援を振り返って—



▲震災後、一羽もいなかったカモメが戻った大船渡市の海辺

3月11日に発生しました東日本大震災で、過去にない大きな被害が各地に発生しました。

甲賀市では、震災発生翌日の3月12日から被災地に職員と給水車を派遣し、給水活動を展開しました。その後、活動地のひとつである岩手県大船渡市に限定し、復旧復興のために同市が支援を必要とする業務に対し、5月初旬から10月末までの間、関係職員を派遣してきました。

今号では、現地で活動を行った職員延べ91名のうち、5名の現地での体験を通じて、これからの防災に対する考えを振り返りました。

いつ起こるか分からない自然災害ですが、災害に見舞われた後の行政や地域の役割がどう果たされていくべきかを一緒に考えてみてください。

任された仕事への 責任感をより強く

西川 私は、3月16日から現地で給水活動を行いました。

まちは瓦礫で埋まり、大きな通りによろやく重機が動き出した頃です。人の力ではどうしようもないような風景でした。

林 5月9日から瓦礫撤去の監理業務を担当しましたが、想像以上にひどい状況でした。テレビで見ているのとは違い、広範囲に広がる静寂に包まれたまちを実感し、悲しい思いがこみ上げてきました。

陰山 私も同じような感想です。現地へ入るため東北新幹線で北上すると、車窓から屋根にシートがかがせてある住宅が次第に増えていくのを見て、災害の大きさを改めて認識しました。

平尾 震災から2か月後と10月の2回、保健師としての業務を担って現地に入りましたが、初回は水道や電気、電話などインフラが復旧され



よしくに 嘉邦
にしかわ 西川
人権推進課主査 (給水支援)

ておらず、仮設住宅が建設され始めた時期で、市民生活も安定というにはまだまだ遠いというのが第一印象でした。

2回目の10月には、瓦礫もだいぶ片付けられ、避難所にいた皆さんは、ほぼ全員が仮設住宅に入居されましたが、気持ちの面で自分の居場所が見つけられていないような気がしました。

5月頃は、どの人も私たちに「ありがとう」という言葉をかけていただき、辛い話もされませんでした。それが、6か月経つと、正直な気持ちを打ち明けられ、心の中にいろいろなことを残されているのが分かり、まだまだ辛い時間が続いているとされるよ

うでした。

藤森 私は、9月14日から市役所窓口で戸籍事務を担当しました。被災され、家族を亡くされた方と接する場面も多く、書類の死亡欄に「3月11日」という文字を見ると、胸が痛くなりました。

た。かける言葉は見つけられませんが、挨拶だけはしっかりするよう心がけました。

西川 市民の皆さんへの対応ということでは、震災直後でパニック状態かもしれないと予想していきま

した。しかし、皆さんが落ち着いて、助け合っておられました。給水もできるだけ希望される量を提供しました。タンクの水が無くなり、給水が受けられなくなっ

ても、文句を言う人もなく、逆に助けてもらったと思います。

林 中嶋市長からは、「大船渡市役所の職

員になりきって」ということを言

われて臨みました。それをどこまで成できたかは分かりませんが、一つの現場を任せられましたので、責任をもって仕事を全うするよう最大限の努力をしました。任された仕事に対する責任感は、普段以上に感じます。

陰山 派遣期間は一週間程度でしたが、大船渡市の職員は、今後も市民と関わり続けていく立場にあります。そのため、私たちが派遣期間にした仕事で後に迷惑がかららないようにしなければなりませんので、一つひとつの業務を正確に処理することを常に心掛けていました。

私は、義援金等の受付事務に携わりました。5月は市役所内での受付を開始したばかりの頃で、長い列を



たか 崇子
かげやま 陰山
社会福祉課主査 (義援金関連業務)